

インタビュー技術の向上をめざして —効果的な発話抽出のためにすべきこと—

嶋田和子

イーストウエスト日本語学校

要旨

ここ数年 OPI の需要は高まってきており、大規模データベース作成など今後もさまざまな活用の可能性が考えられる。そういった状況下でテストとしてすべきことの1つとして、「インタビュー技術の向上」があげられる。それは、「インタビューがしっかりしたものであれば、判定でぶれることはあまりない」ということから、「インタビュー技術」を磨くことがいかに大切かが分かる。

本稿ではまず、テストの効果的な聴き方と話し方の留意点について考える。さらに、インタビューで求められる重要な能力として、「質問力」「突き上げ力」「話題のスパイラル展開力」について述べ、最後にロールプレイに関してテストが求められていることに触れる。考察にあたっては、できるだけ『マニュアル』を引用し、また具体的な事例を紹介しながら、述べることにする。

【キーワード】共感的な聴き方、質問力、突き上げ力、話題のスパイラル展開力、ロールプレイ

1. はじめに

日本語 OPI は年々テストも増え、また社会的認知度も高くなり、口頭能力試験として使用される範囲も広がってきている。調査研究の依頼、大学内でのプレースメントテストの実施、OPI を活用したデータベース作成のためのテスト依頼など、ここ数年 OPI の需要は拡大し続けている。

OPI を活用した大規模データベース作りの例として、独立行政法人国立国語研究所日本語教育基盤情報センター⁽¹⁾ が3年間にわたって実施した、OPI を活用した日本語学習者会話データの収集、整備事業がある(2006～2008年度)。このデータベースは、390名の横断調査と、20数名からなる縦断調査(同一の対象者を定期的に調査したもの)の2つの種類からなる⁽²⁾。このような大規模な OPI データの収集は初めての試みであり、研究や教育実践への活用が期待されている。なおこの OPI データベース作りは、実施機関の変更はあるものの、データ構築のための作業を続けていくことになった⁽³⁾。

このデータベース作りのために多くのテストに関わり、OPI の実施、セカンドレイティング、話し合いなどが行われた。その過程において関わったテスト間ではさまざまな気づきがあったが、その1つが「インタビュー技術を向上させることの重要性」である。テストはともすれば、ワークショップを受けた時の諸注意を忘れ、自己流になりがちである。今回のデータベースでは、すべての OPI にセカンドレイティングをつけたため、このプロジェクトに関わったテストはたくさんの「他のテストのインタビュー」を聴くという貴重な機会を得た。そこで、自分自身のインタビューの振り返り、セカンドレイテ

イングで聴いた「他のテストターのインタビュー」から得たヒントや疑問点など、さまざまな「インタビューの課題」と向き合うことになったのである。

定例会でのブラッシュアップセッションを見ても、どうしても判定を中心としたものになっている。また会員からも「判定が割れないように、しっかり判定の仕方を学びたい」「判定がぶれないようにするためのセッションをしてほしい」といった声をよく聞く。しかし、筆者は「インタビューがしっかりとしたものであれば、判定が割れることは少ない」という理由から、インタビュー技術を向上させることこそ重要であると考え。むしろ各自の判定尺度そのものがぶれていた場合には、信頼性のある判定は望めないが、そうでなければインタビューに問題があることが「判定割れ」の原因になっていることが多いと思われる。

そこで、本稿では、テストターのインタビュー技術の向上をめざして、次の4点を取り上げる。

- (1) 被験者の発話を引き出す時に大切なのは、テストターの聴く姿勢である。共感的に聴き、相手の言ったことを「紡ぎながら話を進める」ことができるように考えながら聴くことが重要である。
- (2) テスター自らの発話量に気をつけ、質問の型を意識し、被験者の発話を引き出すような質問をしたり、適切に受け答えしたりすることが重要である。
- (3) 話題の選択、話題のスパイラル展開などが自然な形で、かつ効果的に行われることが発話抽出の鍵となる。そのためには普段から「話題のスパイラル展開」を意識しておくことが重要である。
- (4) ロールプレイ実施に問題があるインタビューによく出会う。特に、超級における「敬語」「砕けた言い方」の抽出の際の不手際が多い。超級の「敬語」「砕けた言い方」という2つの条件は、『ACTFL-OPI 試験官養成用マニュアル』（以下、『マニュアル』と略す）に記載されていないものであるため、テストターが勝手な解釈に陥ってしまうケースが見られる。

(1)については次の2.で、(2)については3.で、(3)については4.で、(4)については5.でそれぞれ述べることとする。なお詳述するにあたって、次の2点を強調しておきたい。

- (1) できるだけ『マニュアル』の文言を引用しながら記述していく。それは、テストターは常に『マニュアル』に立ち返ることが重要だからである。
- (2) 「教師力」とリンクさせながら記述していく。それは、OPIでインタビュー技術を向上させることは、教育実践と密接につながっているからである。

2. テスターの効果的な聴き方

2-1 共感的な聴き方をすること

「OPIは、被験者が伝えようとしていることに注意を払い、興味を示さなければならない(M:51)」（Mは『マニュアル』を指す）のであり、共感的な聴き方が求められる。機械的

な聴き方や、「次にはこれを質問しよう」と他のことを考えながら被験者の話を聴く姿勢では、被験者から発話を効果的に引き出すことは難しくなる。

しかし、共感的に聴くことが重要だからと、行き過ぎてしまうケースも見られる。OPI は「おしゃべり会話」ではなく、口頭能力を測定することを目的としていることを忘れてはならない。「学習者中心の評価(M:11)」ではあるが、あくまでナビゲーターはテスターなのである。ラポール作りをし、ただ真剣に聞き入るだけでは共感的な聴き方にはならないことをよく理解しておく必要がある。

2-2 「普通の日本人」のように聴くこと

ワークショップで受講生に「教師であることを忘れるように／教師根性を捨てるように」とアドバイスするのだが、外国人の発話に慣れた日本語教師として振る舞ってしまうことが多い。被験者が言葉を言い違えた場合は、「ああ、多分こう言いたいのだろう」と推測できても分からない振りをしたり、英語や母語を使用した場合には、「すみません、ちょっと英語が分からないので、日本語で言ってください」と言ったりする必要がある。「発話抽出に関する注意事項：すべきこと」として「外国語が話せないように振る舞うこと(M:75)」があげられている。

テスター：どこから来ましたか。
 被験者： あ、台湾です。カオションから来ました。
 テスター：ああ、カオションですか。ええ、今どこに住んでいますか。
 被験者： ドミトリー。学校の近くです。
 テスター：ああ、学校の寮なんですね。

このテスターは中国語が分かるため、「高雄(タカオ)」の原音読みがわかる。また、「ドミトリー」に関しても、「えっ？」と聞き返さず、「寮」と日本語で言い換えてしまっている。ここは、英語が分からない振りをし、日本語で言い換えさせてみるのが求められる。

2-3 被験者の「沈黙」との向き合い方を会得すること

「OPI 発話抽出のための一般原則 10」には、「被験者が黙ってしまったからといって、必ずしも発話能力に問題があるということにはならない(M:51)」という箇所がある。すなわち、「沈黙」には幾つかの種類があるということである。

- ① どう話せばよいか考えていたり、次に言う言葉を探っていたりする場合
- ② 発話の限界を示し、言語的挫折を起こしている場合
- ③ そのことについて話したくない、語りたくないと思っている場合

では、どの種類の「沈黙」なのかをどうやって見極めればよいのか。たとえば、②の場合は、「躊躇した様子と共に神経質な笑いや身振り、戸惑いの表情などが見られるのが普通である(M:72)」というように、被験者を十分に観察することによって「沈黙」の持つ意味

を理解することができる。「学校の授業などでは沈黙は能力の欠如と判断しがち」であることを教師は大いに反省すべきであり、「被験者が黙ってしまったからといって、必ずしも発話能力に問題があるということにはならない(M:72)」ということを改めて理解しておく必要がある。

3. テスターの発話上の留意点

3-1 テスターの発話を最小限に抑えること

「インタビューでは、試験官ではなく、インタビューを受けている被験者の方が会話のほとんどを受け持っている(M:121)」のであり、テスターの発話は最小限に抑えなければならない。最長 30 分と限られた時間内で、できるかぎり被験者の発話を抽出するには、テスターは効果的な質問・受け答えをする以外は完全な聴き役に回ることが重要である。

しかし、実際のインタビューでは、テスターが次々と質問をしたり、意見を言ったりしているケースが見られる。教師は「話す人・説明する人」という刷り込みがあるせいか、どうしてもターンを取って話したり、説明を加えたりしがちである。インタビューの中で、知らぬ間に「被験者に対して説明を始めてしまっている事例」なども見られる。

次の例は、被験者が台湾の新幹線の話をしようとしているのだが、テスターが言葉を取ってしまったたり、ついには台湾の新幹線の説明まで始めたりしている。被験者は「はい、ええ」という相槌に徹し、「システムは」と切り出そうとしても、そのことを意に介せずテスターが話し続けているという事例である。これほど極端な例は少ないまでも、似たようなケースが多々見られるのが現状である。

(新幹線の話題)

テスター：もう乗りましたか。

被験者： ええ、この春休みに初めて乗りました。

テスター：ご感想はどうですか。

被験者： あのを、車両は日本のメーカーで、たしかに三菱。

<被：言葉を選んでいる>

テスター：たしか日本メーカーですね、車両、はい。

<テ：言葉を取ってしまった>

被験者： なので、日本の新幹線とは(テ：はい)あまり変わらないんですね。

テスター：あ、そういう感じですか。

被験者： そうです(テ：はい)。で、駅構内はすごくきれいで(テ：ええ)、広くて(テ：ええ)、いい印象でした。

テスター：ああそうですか。あの、新幹線といえば、たしか車両は日本、つまりハードシステムは日本だけど(被：はい)、運行のソフトウェアは(被：システムは)、なんか、(被：フランスかドイツ)フランスで取り入れたそうですね(被：ええ)それで、さらに面白いことには(被：はい)、私は新聞で読んだんですけど(被：はい)、運営している会社の方が(被：はい)、航空会社出身の方が多(被：ああ、そうですか、詳しいことは分からないんですけど)。聞か

れたこと、ありませんか。え、ですからね(被:はい)。なんか、そのう(被:はい)、新幹線に乗る手続きなんか(被:はい)、すごく、飛行機に乗る手続きと似ててね(被:ああ)。新幹線の入口のところにちゃんと人が立って(被:ああ)、搭乗口へ案内する、そういう雰囲気(被:はい)、お客様を扱っているということを(被:ああ)読んだことがありますけど、そうでもないですか。

※テストの発話と被験者との関係性を明確にするため、この事例では、相槌をできるだけ忠実に記述した。

3-2 被験者の発話を取って先に話してしまったり、文末を重ねたりしないこと

初級後半や中級レベルでよく見られることとして、テストが被験者の話を途中で取ってしまい、被験者に変わって文を完成させてしまうということがある。「語彙を与えたり、被験者に代わって文を完成させたりする(M:73)」ことは、してはならないこととして『マニュアル』にあげられており、「このような行為は、被験者の言語能力をできるだけ確実に判断しようとする OPI の目的に反する」と述べられている。

被験者： 今年3月で、学校終わって、あと、あの。

<被:言葉を選んでいる>

テスト： ああ、帰国でしたね。それで、どうですか。

<テ:発話を取って先に話す>

被験者： それ、それから、仕事を、仕事みつ(テスト：みつけるんですね)。はい、みつけます。

<テ:文末を重ねる>

<被:テストの言葉を受けて言った形になる>

上記の例のように文末を取ってしまえば、この被験者に「どの程度文生成能力があるのか」ということが判定できなくなる。特に下のレベルにおいては、テストのこういった行動は絶対に避けなければならない。すなわち「待つこと」の大切さを十分に知ることが求められていると言える。

OPI のワークショップを受けて、一番自分自身が変わったことの1つとして「待つことができるようになったこと／待つことの大切さを知ったこと」という答えが多い。「気長で根気強くあること(被験者は、会話中に自己訂正したり、言いかけてうまく文にできないために途中でやめたりすることがよくあるから)(M:57)」という『マニュアル』の言葉は、教師としても忘れてはならないことの1つである。

3-3 教師のように振舞わないこと

『マニュアル』には「してはいけないこと」として「被験者の文法や情報を正すこと／教えること(M:75)」があげられている。しかし、人によっては「事実誤認」の場合には、「ここで直さないと、テストとして恥ずかしい」などと考えることもあると聞く。

ここで、「上級-上」という判定が出た「中学 3 年生 A さん」のインタビューの例をあげてみる⁴⁾。

被験者： やっぱり、僕が読んだ中で一番面白かったのは、坂本龍馬の、司馬遼太郎さんの『龍馬がゆく』っていうのは、面白かったです。
テスター： ほう、そうですか、面白かったですか。どんなところがよく……。
被験者： そうですね。龍馬っていうのは薩摩藩に生まれて、それで、そこから出てくんですよね、回りの世界に。そこで、いろんなこと学んで、最後は倒幕っていうことを成し遂げるんですけど。その龍馬が生まれたとき、回りにいた人たちの中で龍馬を認めたのは、唯一龍馬のお姉さんだったんですよ。だから……(続く)。

このインタビューは何人もの人が見ている前で行われたものであるため、終了後テスターは、「どうして龍馬は薩摩藩に生まれて、というところで訂正をしなかったのですか」という質問を複数受けた。インタビューを実施した筆者の答えは以下のとおりである。

もしあそこで「あの、龍馬は土佐藩ですよ」とテスターが訂正したらどうなったと思います？ きっと彼は、「あっ、しまった。間違った！」という思いが頭の中を駆け巡り、もしかしたら、その後の発話にも影響が出てしまったかもしれません。それに、被験者の発話能力を見る時に、「藩の間違い」などどうでも良いではありませんか。

実は、インタビュー終了後「被験者 A とのおしゃべり」の中で、次のようにさりげなく「事実誤認」を伝えた。「土佐」であることを知った時の A の表情を見ても、インタビュー中に指摘しなかったことは適切だったと考えられる。

A さんの話、本当に面白かった。将来までよく考えていてすごいよね。あ、そうそう、龍馬が生まれ育ったのは土佐、高知県よね。私ずっと前に高知に行った時、龍馬が大好きだった「桂浜」に行ったんだけど、あの広〜い太平洋見ると、なんだか龍馬の気持ちが分かるような気がしたのよ。A さんもぜひ行って見て。

また、初級レベルだからといって、ティーチャーズ・トークになったりすることも時々見られるが、これも注意すべき点の 1 つとしてあげておきたい。

テスター：お名前は？
被験者： チンです。
テスター：どこから、来ましたか？
<中略>

テスター：じゃあ、Bさんの、学校は、朝、何時から、何時まで、ですか？

「じゃあ、Bさんの学校は、朝、何時から、何時まで、ですか？」とまるで噛んで含めるように質問をしていく場合がある。もちろん何を言っても「えっ?」「分かりません」という反応の場合には、極端にゆっくりとした話し方になったり、「Desperate 10 Questions」になったりしてもしかたがない。しかし、まずは自然な会話、「普通の日本人」としてインタビューを進めることを心がけなければならない。

4. インタビューの鍵は「質問の仕方」

4-1 「質問力」を身につけること

山内(2005:121)は、よい授業とは「教師のすべての発話がタスクとして意識されている授業」であり、教師の学習者に対する授業中の質問や問いかけという「非明示的なタスク」が重要であると述べている。インタビューもテスターがどういう質問を出すか、被験者からどういう質問で話を展開させていくかで、発話抽出の質も違ってくる。

そこで、気をつけるべきこととしては、1.質問の型を適切に選択すること、2.一問一答的な質問をしないこと(レベルによっては必要になるが)、3.曖昧な質問をしないこと、といったことがあげられる。

質問の型に関しては、「Yes or No」疑問文、選択疑問文、5W1Hの疑問文もあれば、「～について詳しく説明してください」という丁寧な依頼表現もある。また、同じ5W1Hの中でも、「どこで、誰と、いつ」などの質問文と「なぜ」「どのように」という質問文では難易度が異なる。

次の「一問一答的な質問」というのは、いわゆる問題が用意された会話試験のようなものに多い。これでは、テスターと被験者とともに「インタビューを作り上げていく」といったOPIの特徴はなくなってしまう。

ここでは、曖昧な質問の例を記すこととする。

テスター：日本に来てどれぐらいになりますか。

被験者： 2年5ヶ月ぐらい。

テスター：あ、そうですか。その2年5ヶ月の間に日本の文化が分かるようになりま
したか。 <テ：「分かるようになったか」というのは曖昧な質問>

被験者： 来る前よりは、分かるようになりました。

テスター：どんなふうに変わりましたか。

<テ：「分かる」から急に「変わる」という質問は不適切>

被験者： かんぺきじゃないですけど、来る前よりは分かるようになりました。日本
<被：「変わる」も「分かる」と聞こえたのでは？>
人はやさしいし、親切だし、そういう人ばっかしたと思ってたんですけど、
実際はそうじゃない……(続く)。

4-2 「突き上げ力」を身につけること

「突き上げ」とは「probes」の訳であり、この「突き上げ」を効果的に、適切に使うことがインタビューには求められる。鎌田（2008:121-122）は、次のように「突き上げ」について説明している。

これ以上は話せない点に達し、言語的挫折(linguistic breakdown)が生じるようになると、心理的にもストレスを感じはじめます。牧野成一氏は「上限探し」に「突き上げ」という名訳を与えました。確かに、被験者ががんばれるところまで、「突き上げる」のです。しかし、それを続けすぎると、水泳で言えば、被験者を溺れさせてしまいます。ですから、良いところで元に戻さなければなりません。あるテーマで上限がわかれば、別のテーマに移り、そこでの「下限探し」をして、被験者を楽にさせます。そして、また、少しずつ、突き上げ、「上限探し」を行います。

多くのテストターの口から「私は突き上げが苦手で……」「突き上げに適切な質問ができなくて……」といった悩みが聞かれる。テストターが陥りやすいこととして、「いつまでも身近な話題、個人的な経験に留まってしまう」ということがある。

身近なことを話す → 一般化して話す → 社会的な問題として話す
個人的なこと → 社会的なこと、ただし具体的なこと → 抽象的なこと

意識して「突き上げ」を考えていかないと、いつまでも「それで A さんのご両親はどう言われましたか」「その時、どんな気持ちになりましたか」といった、個人的なこと、個人的体験の周りで話を続けてしまうことになる。被験者の能力の問題で社会的なこと、抽象的なことを避ける場合もあるが、テストター自身が無意識のうちに「おしゃべり的なインタビュー」にしてしまっていることがある。ここは大いに気をつけたいところである。

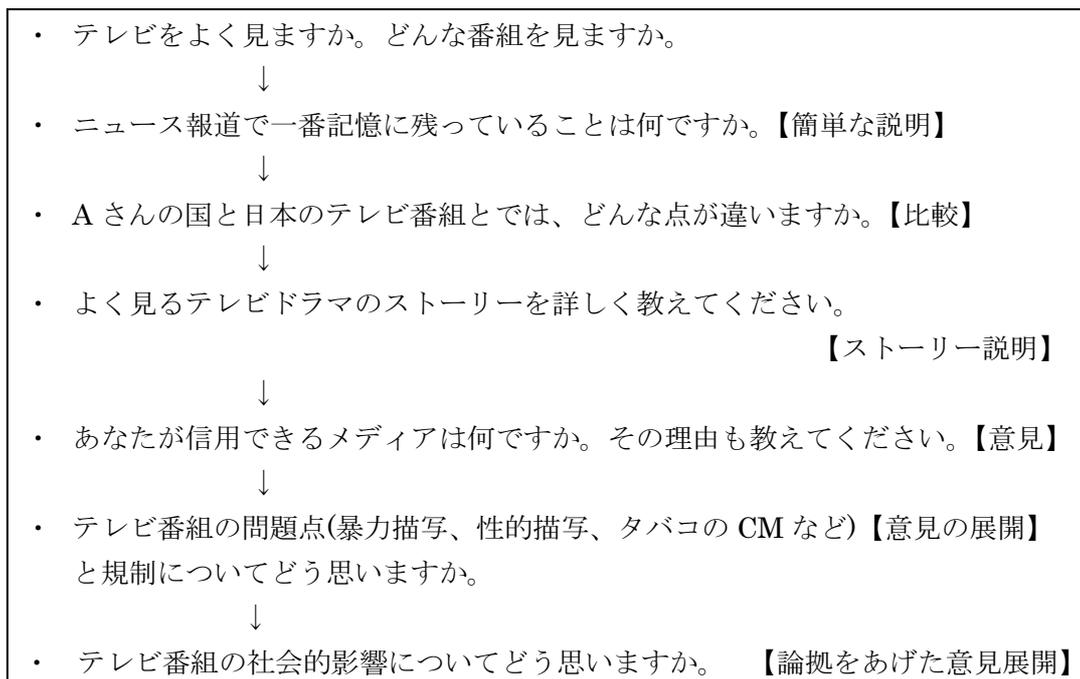
トリプルパンチ(意見→反論→仮説)という言葉はよく理解しているものの、インタビューで実施するとなると、なかなかうまく事が運ばない。このあたりは、普段からある話題で「練習」をしたり、新聞をただ読むのではなく、「突き上げ」を意識してクリティカルに読んだりするというのも 1 つの方法である。

インタビュー中に、「～についてどう思いますか」「～について説明してください」といった発話ではなく、「何の、どういう点について、あなたはどう考えるのか」という聞き方や、「～の点をもっと詳しく説明してください」という工夫をするだけでも、被験者の発話量は増えていく。

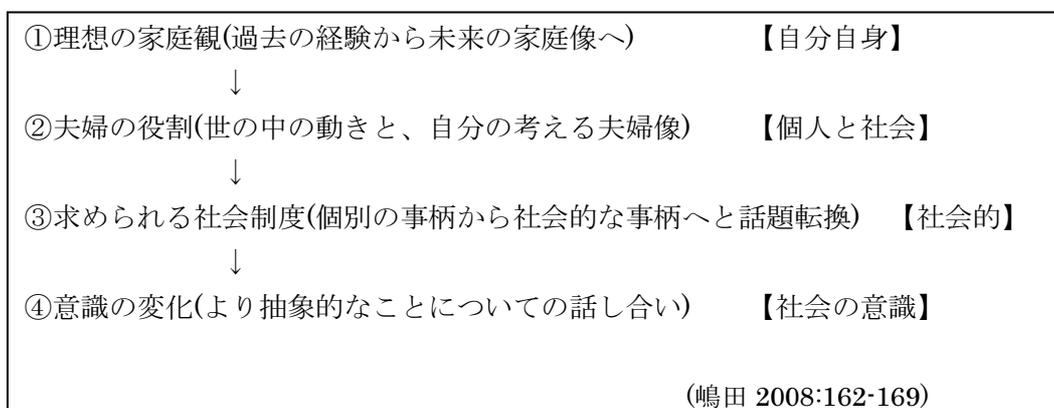
4-3 「話題のスパイラル(らせん状)展開力」を身につけること

『マニュアル』では、「1 つ上のレベルへの突き上げを行うために、その話題の機能を変えることを、らせん状進行と言う」と説明し、「話題を 1 つのレベルから次のレベルにらせ

ん状に進行できたとき、最もうまく発話を抽出することができる(M:62)」と述べられている。この力をつけるには、1つの話題でどのように展開が可能かをグループで話し合うことを勧めたい。1人の発想では限りがあるが、2人、3人と仲間が増えるにしたがって、足し算ではなく、まさに掛け算的にアイデアが蓄積されていくのである。次の例は、あるグループで「テレビ」というテーマでどんな「スパイラル展開」が考えられるか話し合った結果である。できればグループで展開を考えるだけでなく、実際に被験者になったつもりで、お互いにインタビュー体験をすることによって、よりインタビュー技術の向上が図れると思われる。



また、この「話題のスパイラル展開力」は授業をする際にも、大いに生きてくると思われる。たとえば、「働く女性に優しい社会の実現へ」という会話シートを使い、次のようなスパイラル展開を実施した上級クラスの会話授業もある。



5. ロールプレイ力

5-1 ロールプレイ選択力・設定力・実施力

ロールプレイは、「OPI の終わりの 3 分の 1 から 4 分の 1 あたりのところで行う(M:67)」ことになっている。これは、「会話モード」では見ることができない機能をチェックするために行われるのだが、よく「会話モード」で与えたタスクを再度ロールプレイでやろうとしたり、特にロールプレイで測らなくてもよいモノをやってしまったりすることがある。たとえば、「家から学校までどうやって来ましたか」ということを聞いたのに、「友だちがあなたの家に行きます。どうやって行くかおしえてあげてください」というロールを選ぶ必要はない。

また、唐突に「では、次にロールプレイをします。このカードを読んでもください」ということで、読みあげたとたん「スタート」という展開になっていることがよくある。ロールプレイをするにあたっては、状況設定などに注意を払う必要がある。

たとえば、「駅前に置いた自転車について駅員に聞く」というタスクの場合は、被験者が自転車を利用しているかどうかを知った上でカードを選ぶとよい。それは、「会話モード」でのやり取りの内容から推測ができる。

また、「レストランにカバンを忘れた。それを電話で尋ねる」というタスクを実施する場合には、椅子に置いてある被験者のカバンについて、「素敵なカバンですね」と話題にし、「そのカバンをレストランに忘れてしまったんですね」という場面設定をすると、被験者もロールプレイの世界にすんなり入ることができる。

次の例は、「忙しくて空港まで両親を迎えにいけないので、友だちに頼む」というタスクのロールプレイカードを読み終えてすぐに、「じゃあ、私は友だちになります」だけで始めてしまったために、被験者から「名前」を聞かれた例である。もう少し「両親」のことも「会話モード」で聞いておき、できるだけ臨場感のあるロールプレイに仕立てる努力が必要だと考える。

被験者： 私は、両親が……。両親が、今日は、東京に来ます。でも、とても忙しいですから、くこ、空港に行けません。だから、ああ、両親を迎えに、ああ、名前、あなたは……。

<被：ロールプレイを始めてから「やりにくさ」を感じる>

テスター：ああ、じゃあ、田中。

<テ：スタート時に十分に設定しておくこと>

被験者：田中さんは、両親を迎えに……(省略)。

またよく問題になるのが、ロールプレイ実施中のテスターの発話量である。「ロールプレイでは被験者にできる限り多く話をさせるようにする。「ロールプレイでは、OPI のほかの部分と同様、試験官自身はできるだけ話す機会を少なくして、被験者からできるだけ多

くの発話を引き出すようにしなければならない(M:71)」ということが守られていない OPI がいくつも見られるのが現状である。

5-2 超級レベルにおけるロールプレイの正しい理解

『マニュアル』のロールプレイの各項目の超級レベルに関する記述を見ると、以下のようなものがある(M:66-70)。

- ・超級では、言語的に不慣れな状況に対応することができるかどうかを調べる。
- ・ロールプレイは「初級－上」から「上級－中」レベルでは必ず行う。
- ・テストする言語によっては、ロールプレイが複数必要な場合もある。
- ・このレベルでは、ロールプレイは場合によっては行わなくてもよいが、被験者は不慣れな状況の処理ができなければならない。

しかし、OPI が汎言語の口頭能力試験であることから、それぞれの言語によって若干の修正が必要となる。その際にはトレーナー間で協議し決定されるというルールがある。日本語に関しては、十数年前にトレーナー間で「敬語が使えるか」「砕けた言い方ができるか」という2つの「スピーチレベルのスイッチ」を超級認定に追加したのである。ただ、明記された文書が存在せず、ワークショップを通して伝えられてきたものであるため、テスターによっては、年数が経つにつれ、「デスマス体で丁寧に話せていれば OK」という解釈をしてしまっているケースもある。また、「友だち同士の砕けた言い方」を問うロールプレイで実際に被験者が使っていないにもかかわらず「こういう日本語使用環境では、できるはず」という推測で OK にしてしまっているケースまであり、今後のテスターの努力が求められる。

また、「敬語表現ができれば、他に不適切な待遇表現があっても良しとするのか」といった議論や、「果たして『砕けた言い方』を超級の絶対条件とする必要があるのか」という意見も多く出されている。こういった点は、今後トレーナー間で十分に話し合いをする必要があると考える。

しかし、現段階では、この2つの条件は超級の必要条件となっている。この点は十分に注意する必要がある。

日本語 OPI では「超級」と判定されるためには、以下の2点は**絶対条件**である。

- 敬語ができること
- 砕けた言い方ができること

また、「敬語抽出」に関するここで取り決められている「敬語使用」とは、単に敬体で話せるというのではなく、「～でございます／していただけますか／いついらっしゃいますか」といった表現が状況に応じて適切に使えることを意味するという点を付け加えておきたい。

【注意点】

<敬語>◎関係性(親疎関係など)や状況設定を十分に考える。

- ・先輩や店長には使わない場合が多いので要注意。「上司」も同様。
- ・学校の先生の場合にも、「よく知っている先生」には敬語を使わない場合が多い。「一度も会ったことのない学部長」などという設定にする。

<砕けた言い方>

◎関係性や状況設定を十分に考慮する。

- ・「小さい子ども」であっても「よく知っている子ども」など細やかな設定がないとなかなか「砕けた言い方」は使いにくい。
- ・友だちといっても、よほど設定をうまくしないと「デスマス体」になってしまう。

※その他の注意

「この設定では無理」と分かったら、早めに切り上げ「もう1つのRP」を実施する。

5-3 ロールプレイ作成力

「ACTFL から入手できるロールプレイはほんの一例に過ぎない。経験を積めば、それぞれの試験官が自分の OPI で使うロールプレイをいろいろ作ることができるようになるし、またそうすることが望ましい(M:71)」という『マニュアル』の言葉をどれだけの実行者が実行しているであろうか。

筆者は、上述した継続調査のためにA県B市で定住外国人配偶者、C県D町で日系ブラジルの主として高校生を対象に OPI を実施している。そこではその地域に合った、高校生に必然性のあるロールプレイを用意して実施している。たとえば次のようなモノがある。

この町には3時間に1本しかバスが通っていません。それでは不便なので、〇〇高校で□□バス会社の社長さんに路線バスの本数を増やしてほしいと頼むことになりました。あなたは代表に選ばれました。社長さんに頼みに行ってください。

(これは駅前のバス時刻表を見て考えたロールプレイである)

「ロールプレイをカードに書くことによって、試験官は意味のある会話場面のレパートリーを増やすことができる(M:71)」ことを考えると、できるかぎり取り組んでいきたい。

6. まとめ

本稿では OPI のインタビュー技術の向上に絞って論を進めた。もう1つの柱として「レベル判定力」があるが、これについても随時発信していく予定である。OPI という信頼性のある口頭能力試験への関心は高まってきているが、それに応えるには「OPI の品質保証」が大前提である。OPI ネットワークの大きな特徴である「同僚性」と「協働性」を活かしながら、今後もテスト間で力を合わせ、個々のテストの技術の向上、OPI 活用の広が

りに力を尽くしていくことが求められる。

また、判定やインタビュー上の問題を解決する鍵の多くは『マニュアル』に存在することを再度記しておきたい。

「マニュアル」に始まり「マニュアル」に終わる。困ったら「マニュアル」に戻ろう！

2008年8月の「第7回国際 OPI シンポジウム」でのブラッシュアップセッション「OPI の効果的な発話抽出法」においては、実際に目の前で OPI を見ていただき、その後『マニュアル』に基づいてインタビュー技術について講義を行った。その資料も参考にさせていただければ幸いである。

一方、OPI の問題点として「時間がかかりすぎ、実用性に欠ける」という点がある。30分という実施時間は大勢の被験者に OPI を実施する場合には、大きな問題となる。そのほか解決すべき課題も多々あるが、筆者は<30分もかかる試験>という短所を長所と捉えたいと考えている。「30分かけて被験者に『語る』ということを経験してもらうこと」から生まれる副産物は大きい。この点を日本語教育機関だけではなく、地域日本語教育などにも活用していく方法を探っていきたい。その試みの1つが上述した「縦断調査」である⁽⁵⁾。今後こういった「地域定住外国人対象の OPI を活用した調査」をさらに広げていくことは重要であると考えます。

本稿の最後に「インタビュー 30 のチェックポイント」をあげておく。テスターの方々の「インタビューの振り返り」に活用していただけることを願い、作成を試みた。

注

(1) 国立国語研究所は、1948年に「国語に関する総合的研究機関」として発足し、2001年に独立行政法人に移行。2009年10月1日より「大学共同利用機関法人 人間文化研究機構」の6番目の機関として設置されることとなった。

(2) <http://dbms.kokken.go.jp/nknet/> 横断調査して、日本語学習者とテスターの会話データ 390件が、学習者の属性情報とレベル判定付で載せてある。また、縦断調査のデータは、外国人分散地域、集住地域の日本語学習者の会話データがある(分散地域 12名に2回実施<1年に1回>、集住地域 13名に実施。ただし、2年目は経済危機により帰国したインフォーマントが3名いたため、10名に実施)。

(3) 新国立国語研究所では、縦断調査のみ継続して実施することとなった。横断調査はいったん終了という形となったが、2009年度は「日本語テストへの応用をめざしたデータ収集」というタイトルで東京外国語大学が文化庁委託事業として実施することとなった。旧国立国語研究所が平成 21 年度上半期まで実施していたものを踏まえて、その延長線上に位置づけられている。

(4) 継続調査の対象者 A は、2008年2月に実施した第一回では「上級-上」、2009年2月の第二回では「超級」と判定された。

(5) 縦断調査で OPI を受けた地域定住外国人配偶者の変容については、社会言語学会のワークショップで報告をした。詳しくは『社会言語学会第 24 回大会発表論文集』(286-288)を参照のこと。

参考文献

- 鎌田修 (2008) 「ACTFL-OPI における “プロフィシエンシー” の測定」 鎌田修・嶋田和子・
迫田久美子(編)『プロフィシエンシーを育てる—真の日本語能力をめざして』凡人社、
108-129
- 嶋田和子 (2008) 『目指せ、日本語教師力アップ—OPI でいきいき授業』ひつじ書房
- 嶋田和子 (2009) 「地域に定住する日本語学習者への OPI 活用の意義」『社会言語科学会
第 24 回大会発表論文集』社会言語科学会、286 -288
- 嶋田和子 (2009) 「OPI の効果的な発話抽出法」『第 7 回 OPI 国際シンポジウムソウル大会
予行集』韓国 OPI 研究会、25-28
- 野山広 (2009) 「地域に定住する日本語学習者の言語生活に関する縦断的研究—OPI テスト
を活用した会話データからみえてきたこと—」『社会言語科学会第 24 回大会発表論文
集』社会言語科学会、285
- 山内博之 (2005) 『OPI の考え方に基づいた日本語教授法』ひつじ書房
- 牧野成一監修・日本語 OPI 研究会翻訳プロジェクトチーム翻訳 (1999) 『ACTFL-OPI 試験
官養成用マニュアル (1999 年改訂版) 』アルク

参考サイト

「国立国語研究所 日本語教育ネットワーク」

<http://dbms.kokken.go.jp/nknet/>

「日本語学習者会話データベース」

<http://dbms.kokken.go.jp/nknet/ndata/OPI/>

「日本語学習者会話データベース縦断調査編」

http://dbms.kokken.go.jp/judan_db/

インタビュー
する前にチェ
ックしてみよ
う！

テストのためのチェックシート 【30のチェックポイント】

<より良いインタビューをめざして>

聴き方	1	相手の話に関心を示しながら聴くこと
	2	被験者の「沈黙」の意味をしっかりとつかむこと
	3	被験者の外国語使用に関しては、分からない振りをすること
話し方	4	テストがしゃべりすぎないこと
	5	被験者の発話を取って先に話してしまったり、文末を重ねたりしないこと
	6	ティーチャーズ・トークになったり、教えようとしたりしないこと
質問の仕方	7	質問の型を固定させないこと
	8	1問1答的な質問をしないこと
	9	「下固め」が不十分な状態で「突き上げ」に行かないこと
	10	「突き上げ」を十分にすること
	11	「突き上げ」が唐突にならないこと
	12	レベルをチェンジする時には、話題を変えないこと
	13	トリプルパンチの際に、テストの発話が多くなりすぎないこと
	14	話題のスパイラル展開を心がけること
	15	トピック・ホッピングにならないこと
ロール プレイ	16	話題の数が少なすぎないこと
	17	ロールプレイは状況設定に留意すること
	18	被験者に必然性のあるロールカードを与えること
	19	ロールの意図が明確に分かるように注意すること
	20	カード使用の場合、テストか被験者かが読み上げること
	21	超絶で求められる「敬語」と「砕けた言い方」では、特に状況設定・親疎関係などに十分配慮すること
	22	現在 OPI 試験官ワークショップで渡されるロールプレイカードには「敬語」「砕けた言い方」がチェックできるモノは少ない。自作のロールプレイを用意しておくこと
	23	テストのパフォーマンス力の重要性を考えること
その他	24	時間管理を適切に行うこと
	25	被験者からテストへの「反対質問」を忘れないこと (初級上～中級中あたりまで)
	26	テストが被験者の話を「サマライズ」しないこと
	27	被験者にインタビューを仕切られないようにすること
	28	よい雰囲気を出そうとするあまり、単なる「おしゃべり」にしないこと
	29	時計のチェック、実施環境のチェック (例:「録音中の張り紙」「携帯電話の電源」「チャイム」など)
	30	状況によっては「マイク」を使用すること